

## 意見陳述

田中章子

「ワイロ」というのは、常識的には、事業の発注者と受注側が合意の上結託して、高値発注で生じる利鞘を個人が懐に入れるという欲得ずくの行為を言うのでしょうか。

しかし、関西電力株式会社の「ワイロ事件」は、常識に反して、福井県原発立地町の有力者が金品を持って来た際、一部役員は受け取りを拒否したにも関わらず件の人物が返品を拒絶したので「しかたなく預かった」と主張する不思議なケースです。

受け取る意志がないなら、なぜ「自分は真っ当に仕事をして成果を上げ、それらを評価されて重役になった。また、電力供給という社会的使命から公共の倫理を揺るがすことがあってはならぬと考える。よって、いわれのない金品を受け取るなど以ての外」と断固拒否して、突き返さなかったのでしょうか？ 後にそのことが暴露された時、「預かっただけ」と後付けで苦しい言い訳をしたのはどうしてでしょうか？

何十年も前から反原発活動に関わり、抗議行動や株主総会に参加して私が感じるのは、関電内部に「原子力発電所を建設、稼働するためには、立地現地の有力者の意向に歯向かうことは決してしてはならぬ」という「掟」があるのではないかということです。「なんとしても原発推進」という社是に従って原発の無理やり稼働に必要であれば、会社経営の責任を負う重役は自分の誇りや倫理感を捨て去ることも受け入れなくてはならないということが「掟」となっていると思われまます。

だから、「その金品を贖った原資はどこから出ているのか」と不審に思わないのも、関電が福井県の企業を優遇（随意契約・高値発注）する慣例から、疑問を差しはさむ余地がなかったのでしょうか。

そして、「ワイロ」問題を社内で調査した時も、自社のあり方を見つめ直し、軌道修正し、経過を公表することなど想像することもできず、ひたすら誤魔化し隠蔽することしか念頭になかったのは、「掟」があまりにも強く会社を支配していたからと思えます。

以前、福井の方から、土地の古老が「ワシは原発なんぞという難しいことは何もわからんが、あれだけカネをばら撒くことからすると、きっと危ないものに違いない。もし電力会社が言うように原発が安全なら、あんなにカネをばら撒く必要はないはずだ」と言っていると聞いたことがあります。地元に着用を持つ人は自分たちの故郷に関わる事物の本質をきちんと見極め、当たり前前の感覚で原発の危険性を察知しています。

しかしながら一方では、福井県は、地域振興の手段が貧弱で過疎に悩む地域と見なされています。地元有力者の一部は地域経済という名目の自社経営のために、原発推進のお先棒を担ぎ、原発の危険性に目をつむり、関電の弱みに付け込んで、利益追求をしているのが悲しい現実です。

森山元助役もその利益を当てにする地元企業と深い関わりがあり、福井県に迷惑施設を押しつける関電との共犯関係を強固にする役割を担っていたと思われまます。「ワイロ」によって関西トップ企業の重役を「負の連帯の輪」に取り込み、金の力で踏みつけにされた地域の悔しさを、目前の重役に見せつけたかったのかもしれない。

私は、関電重役ともあろう方々が誇りを捨て、「ワイロ」を受け取った、または拒絶することをしなかった罪は、実は「ワイロ」を受け取るよりずっと重い、「危険な原発をなんとしても稼働させる」という社会を裏切る行為を容認した罪であると考えています。原発が立地地域の方々の命や暮らしを脅かす可能性がある「危険」を前提にした施設であるにも関わらず、住民の不安を「金」の力で抑え込み、原発を会社全体で推進してしまった罪です。

「原発」がどれだけ会社を歪め、社会の不公平を増長し、地域格差を拡大し、人間関係の分断による不信感を深めたかを思うと口惜しくてなりません。

私は、今回の問題が明るみに出た時に「預かっただけ」と言い張る役員らの心境を想像して、一部の方は罪を逃れるためではなく、自分は会社の「掟」と一個人の「誇り」や「良心」との板挟みになっていたのだ、まだ自分には「誇り」や「良心」のかけらが残っていると証明したいためかとも思いました。

私は、「ワイロ」に関わった重役だけでなく、問題を隠蔽した人達にも、少しでも「良心」が残っていることを期待して、それら良心のかけらを拾い集めて、自ら「原発の闇」を詳らかにし、健全な会社再建に向けて「真つ当な仕事」をしていただきたいと願ひ原告になりました。被告には「良心」を発揮する対応をしていただきたいと思います。

故郷を大切にする福井県民に対して、関西の人間は関電の不祥事を許さないという姿勢を示さなくてはならぬと思っています。私たちは、この「ワイロ」から、原発推進の歪みを告発し、やがては「ハイロ」に辿り着けるよう、たゆまぬ歩みを進めていくつもりです。